

ミヒャエル・ボレマンズ研究

—— 1990年代におけるゲントの現代アートの動向について ——

石川絵梨花

はじめに

ミヒャエル・ボレマンズ (Michaël Borremans, 1963-) は、ベルギーのゲントを拠点に活動する現代アーティストであり、その不穏な雰囲気や不条理な表現で知られている。ボレマンズは1996年に聖ルーカス芸術科学大学を卒業し、2000年以降ゲント現代美術館やダラス美術館などで個展を開催するとともに、2004年のマニフェスタ5や2006年のベルリン・ビエンナーレなどにも参加している⁽¹⁾。

ボレマンズに関する先行研究は少なく、主な先行研究と言える展覧会図録は、現在約20冊出版されている。その中でも最も古い個展のカタログは、ボレマンズのキャリアの中で一つのターニングポイントとなった2004～2005年の初となる二つの国際巡回展と言える。一つはドローイングを中心とした展覧会「ドローイング／ドローイング／ドローイング (Zeichnungen/Tekeningen/Drawings)」⁽²⁾で、一方は油彩を中心とした展覧会「パフォーマンス (The Performance)」⁽³⁾だ。しかし両者において1990年代の活動は指摘されていない。2008年にはギャラリー小柳で個展を開催し、それ以降日本でもボレマンズの作品が展示されるようになった⁽⁴⁾。2011年の「第4回ヨコハマ・トリエンナーレ2011」⁽⁵⁾にも出展し、そのほか原美術館や両足院、金沢21世紀美術館で個展、グループ展を開催している。

ボレマンズはこれらの展覧会のほかに多くの展覧会を行っているが、これらの先行研究では、ボレマンズが国際的に活躍しはじめた以降の作品を中心に扱っており、初期活動について言及されているものはない。またボレマンズは1984年にゲントに移って以降、現在までゲントで作品制作を続けている。このゲントという街は1992年の「ドクメンタ9」のディレクターを務めたヤン・フート (Jan Hoet) が活動していた都市であり、フートによる企画展やプロジェクトの影響力を無視することはでき

ない。またボレマンズが国際的に活躍するようになった要因として、フートの存在は大きいと考える。

以上のことから小論の目的は、今まで言及されていないボレマンズの1990年代の活動に注目し、彼の修行時代を調査することで、1990年代から2000年代における作品の変化、もしくは現作品との類似点を指摘することによってボレマンズの作品における新たな視座を提示したい。

1. クロックスハボックスの活動

1990年代におけるボレマンズの活動について論じられているものはなく、彼の経歴を地道に確認することで90年代におけるボレマンズの活動を追った。ボレマンズは84年にアントワープへ移り作品制作を行っており、95年に行われた初の個展⁽⁶⁾がクロックスハボックス(Croxxhapox)(以下「CROX」と表記する)という団体で行われていることが明らかになった。その後もCROXのプロジェクトに参加している。

CROXとは、アーティストのハンス・ファン・ヘルシル(Hans Van Heirsele)とフランク・ファン・デン・エークハウト(Frank Van den Eeckhout)、グイド・デ・ブローイン(Guido De Bruyn)によって1990年に創立された組織である⁽⁷⁾。若手アーティストのための、非営利な団体として活動し、特定の場所にとどまらず、アントワープ市内で拠点を転々としながらプロジェクトを展開している⁽⁸⁾。

参加しているアーティストは作品の制作のみならず、オーガナイザー、キュレーターとしての役割も担いながらプロジェクト、展示を行う⁽⁹⁾。特徴として、作品を街中に展示することで、市民を巻き込んだプロジェクトを展開しており、現在ではアントワープ市の補助を受けながら活動しており、作品展示よりもパフォーマンスの傾向が強くなっていると言える。CROXは以下のように自らのミッションを示している。

CROXは、芸術的実践の場、交流の場、発展の場となることを目的とする。そしてアーティストが運営する芸術団体として、芸術機関の制度的・実質的な位置を探り、再定義することを目指している。⁽¹⁰⁾

このことから、CROX はオルタナティブ・スペースとしての役割を担っていることがうかがえる。CROX では作品制作と展示のほか、「ザ・シンギング・ペインターズ (The Singing Painters)」⁽¹¹⁾ というバンドを結成するなど、様々なイベントを行っている。現在、ボレマンズは CROX から脱退しているが「アーティスト」の一覧で彼の名前を確認することができ⁽¹²⁾、サイト内ではボレマンズが過去に CROX で行った展覧会などを参照することができる⁽¹³⁾。CROX のアーカイヴでは、多くの写真が記録・公開されているほか、アートジャーナリストのヒルデによるインタビュー記事の掲載、CROX に関して言及している芸術系雑誌についても記録されている。多様な方法、視点からゲントの、若手アーティストのプロジェクトを記録していることから、CROX のアーカイヴは、有用性の高いものと言える。ボレマンズの 90 年代の活動を追う上で、CROX の公式サイトにあるアーカイヴに依存せざるをえないとも言える。

次に 90 年代におけるボレマンズと CROX の関係について見ていく。85 年に CROX の創立者の一人であるヘルシルと同じ建物で生活することから二人の関係はスタートする⁽¹⁴⁾。90 年に CROX が設立し、その一年後に行われた「コピーアートプロジェクト」でボレマンズは初めて非正規メンバーとして CROX のプロジェクトに参加した⁽¹⁵⁾。95 年にボレマンズ初となるドローイングの個展を開催し、96 年に再度屋外展示型のプロジェクトに参加する⁽¹⁶⁾。96 年に CROX の正式なメンバーとして参加し、脱退と復帰を繰り返しながら 2000 年 7 月に再度脱退した⁽¹⁷⁾。次にボレマンズが初めて参加したプロジェクトについて詳しく見ていく。

2. コピーアートプロジェクトについて

コピーアートプロジェクトは、CROX で 17 回目に行われたプロジェクトのため「Crox17」とも呼ばれており、全 3 回に渡ってゲント市街地で行われた最初のストリート・プロジェクトだ⁽¹⁸⁾。1 回目に行われたものは「Crox17-1」と呼ばれ⁽¹⁹⁾、ボレマンズは総勢 16 人のアーティストが作品を制作・展示した「Crox17-1」に参加した⁽²⁰⁾。A3、もしくは A2 サイズ、カラーまたはモノクロの作品をポスターとして、3 週間ご

とに約 30 カ所で展示された⁽²¹⁾。1991 年 4 月に当時拠点にしていたペーフェルハウト広場通り 7 番地の建物から退去するも、すぐに新しいスペースを見つけることができなかった際、CROX の名前を目に見える形で、街中に残しておきたいという意図からコピーアートプロジェクトが考案された⁽²²⁾。CroX17-1 にて、ボレマンズが制作した作品の作品題目が不明のため本論文では「CroX17-1 にて出展された作品」と示す。

コピーアートプロジェクトについて直接的な批評はないが、1991 年に CROX が開催した屋外型展示「通りすがり」展⁽²³⁾のカタログ内に、コピーアートプロジェクトについての記述を確認することができる。

街に流通する商品が記号として消費される状況においてのみ、「通りすがり」展のようなプロジェクトは意味がある。以前、ポスターを街中に貼ったプロジェクトもそうだった。アートのための特別な空間は必要なく、ストリートが美術館の役割を果たすことができる。束の間であっても、目立つことに変わりはない。⁽²⁴⁾

このことから、ヒューゴ・デ・ブームが「通りすがり」展の先駆としてコピーアートプロジェクトを位置づけていることがわかる。しかしブームは「束の間であっても、目立つことに変わりはない」と言及しているが、コピーアートプロジェクトについて当時、批評されていなかったことから、コピーアートプロジェクトについて「目立った」とは言い難い。

ともあれ CroX17-1 を境に、CROX では「通りすがり」展をはじめ、「コピーアートプロジェクト (CroX17-2)」(1992 年 1 月 1 日～8 月 31 日)、「コピーアートプロジェクト (CroX17-3)」(1992 年 2 月～3 月)、「感嘆詞 (Signo de Admiracion) (CroX20)」(1992 年夏実施予定 [中止])⁽²⁵⁾、「芸術 (Kunst) (CroX21)」(1992 年 10 月～11 月実施予定 [中止])⁽²⁶⁾、「開いたドア (Open Doors) (CroX51)」(1997 年 9 月 28 日～10 月 6 日)⁽²⁷⁾、「設置窓 (Instalraam)」(1995 年～2017 年)⁽²⁸⁾ が展開された。

このことからコピーアートプロジェクトは、街中で作品を展示する前衛的なプロジェクトであったことがわかる。しかし 92 年に実施予定であった 2 つのプロジェ

クトの中止や92年から94年までの活動休止など、90年代は創立して年数が浅いということもあり、不安定な状況であると言える。また90年におけるCROXの評判について、ベルギーで刊行されているオランダ語の有力雑誌『デ・モルゲン (De Morgen)』とのやりとりから、CROXの知名度の低さをうかがうことができる。

新時代に入り、『デ・モルゲン』は、どうやら主流のギャラリーと美術館のプロジェクトにしか興味を示さないようだ。フォーカマーやCROXのような組織は、彼らにとって価値がないのだろう。皮肉なことに、90年代半ばに開催されたボレマンズやデ・コックのプロジェクトは、批評すらされなかった。⁽²⁹⁾

これらのことからCROXは若手アーティストの作品展示、プロジェクトの場として精力的に活動するも、90年代において主要な組織ではなかったと言える。

一方、ボレマンズは、95年にCROXで自身初となる個展を行い、一年後96年にはリールにあるギャラリー、フォーカマーで「ミヒャエル・ボレマンズ：知的なオフィス (Michaël Borremans : Cerebral Office)」展⁽³⁰⁾を開催するなど、個展の機会を徐々に増やしていく。特に98年にカルケンにあるギャラリー、イン・デン・ボウで開催された「ミヒャエル・ボレマンズ：精神とその限界 (Michaël Borremans : The Mind and its Limits)」展⁽³¹⁾でヤン・ファン・イムシュート (Jan Van Imshoot) と知り合うことで、フートを紹介された⁽³²⁾。これを契機にボレマンズは、アントワープ現代美術館での個展をはじめ国際的な活躍に繋げていった。

またフートとボレマンズは頻繁に手紙のやりとりを行うなど交流もあり、ボレマンズはフートへの追悼の意とともに「彼はとても特別な人で、とても温かい人だった。彼がいなくなるのは寂しい」⁽³³⁾と言及している。ボレマンズにとって、フートの影響は大きいと言える。

3. ボレマンズの作品の変化 (1990年代)

90年代は、ボレマンズの制作方法が大きく変化する年でもある。80年代から90年

代前半で、主に銅版画やリトグラフなどの作品を制作していたが、95年ごろになると徐々に、ドローイングや油彩作品に変化していく。

「Croxx17-1にて出展された作品」に注目すると、画面上部には「クロックスハボックス」の文字が記され、画面中央にはAラインのイブニングドレスを着た女性がいる。女性の頭上には浮遊した物体が描かれており、画面向かって左から、箱から伸びる棒に刺さった頭部、人物、翼のついた車が描かれていることがわかる。これらのモチーフに女性は気づいていないのか、もしくは関心がないのか、その視線は画面向かって左側に向けられている。

《知的シリーズ：未知なるもの (Cerebral Series: the Unknown)》の作品は96年にフォーカマーで行われた個展「ミヒャエル・ボレマンズ：知的なオフィス」展で展示された作品の一つだ。画面は、空間を俯瞰したように斜め上から見た構図になっており、画面の上部、5分の3を棚が占めている。その棚の上には26個の人型が置かれ、全身あるものから膝から上のみ、頭部のみなど、その形はさまざまだ。棚の上にはデッサンのような人物が2人描かれ、棚の下では7人の人物が机を囲み、その上にある二つの人形を見つめている。二つの作品を比較すると、両者ともに90年代以前から行われていた制作方法であるが、その構図は大きく異なる。

人物の描写について、96年の展覧会に関わったマイケル・デネイヤーは、「人物の視線は画面の外側、見る人から離れて、見えないものを見ている」⁽³⁴⁾と言及している。《知的シリーズ：未知なるもの》では、棚に置かれている人型はどれも向かって左側に視線を向けており、その視線の先は画面に描かれているモチーフでも鑑賞者でもなく、作品内に描かれていない空間に向けられていると言える。同様に「Croxx17-1にて出展された作品」に描かれている女性も向かって右側に視線を向けており、その視線の先は《知的シリーズ：未知なるもの》と同様と言える。

また作品を細かく見ると、《知的シリーズ：未知なるもの》に描かれている棚の、最上段向かって右から二つ目にある人型は、頭部から棒が飛びでて、その棒の先に頭が刺さっていることがわかる。これと類似するモチーフが「Croxx17-1にて出展された作品」に描かれた女性の頭上に浮遊する頭部にも見ることができる。またこの身体描写に対するボレマンズの関心は、彼の作品を研究する上で重要な点と言える。《勇

敢な芸術のための小さな美術館 (Small Museum for Brave Art)》《外観 (The Appearance)》は2000年以降に制作されたドローイングであるが、その構図は《知的シリーズ：未知なるもの》と類似しており、この点から制作方法を変更する間際から、「CroX17-1にて出展された作品」のように、人物を中心に事物を配置するのではなく、人型を並列させる構図に惹かれていたことがわかる。

その一方、油彩画では人物を中心とした構図が多く見られるようになる。CROXでは「クロックス・カード」という名前でアーティストの作品を販売しており、ボレマンスは1998年にクロックス・カードとして croxcard 7《犬 (DOG)》⁽³⁵⁾、croxcard 8《妖精 (PIXIE)》⁽³⁶⁾、croxcard 19《特定された恐怖 (無限の愛) (TERROR IDENTIFIED <LOVE UNLIMITED>))》⁽³⁷⁾ を制作した。

《犬》、《妖精》、《特定された恐怖 (無限の愛)》の構図に注目すると、「CroX17-1にて出展された作品」のように人物を中心に置きながらも、事物を周囲に配置する構図でも、《知的シリーズ：未知なるもの》のような俯瞰した構図とも異なる。一方、描かれているモチーフは、足や上半身のみ、もしくは身体の一部を見せないように描かれている。

《犬》は赤い長靴が中心に描かれている。右の足が軽く曲げられていることから、重心が左足にあることがわかる。このコントラポストにより、描かれていない上半身が左足に支えられていることを想起させられる。《妖精》では、デコルテから頭までを赤い色面が覆い尽くしているが、赤い色面から透けて肩部分の輪郭と衣服の影を確認することができる。このことから、赤い色面の向こうに肩があることを想起することができる。一方、右頬の輪郭を確認することはできず、顔の陰影などを確認することができないことから、顔の部分のみ赤い色面によって隠されている。そして《特定された恐怖 (無限の愛)》では、少女の横顔が画面中央に描かれているが、首元の黒色のフリルより下に視線を向けると、肩は背景とほぼ同化するように描かれている。そのため、首元の黒色のフリルと、洋服の赤いストライプ、横顔が白い背景に浮かび上がっているように見え、その描写は首から流れる血液のようにも見える。

このように CroX-17での作品から油彩作品までの変遷を見ると、作品の一部分として描かれていた「切断された身体」は、油彩作品に移行することで作品の中央に描か

れるようになったことがわかった。この点により、切断された身体はドローイング作品のみならず、油彩画でも重要な要素であり、加え視線に関しても油彩作品の重要な要素と言える。

この身体描写の効果について2005年に行われた「パフォーマンス展」中で「ボレマンズの不可解な世界では、人間、もしくは人間の姿が繰り返し用いられるモチーフ（ライトモチーフ）であり、生命のあるものが無生物と常に緊張関係にあるのは不思議ではない」⁽³⁸⁾と言及されている。この指摘は2005年以降にも言及されることが多く、ボレマンズ作品の重要な視点と言える。

以上、作品の比較分析を行うことによって、1990年代に制作方法が大きく変化するも、そこに描かれているモチーフに類似性を見出すことができ、その類似性は今後の作品を研究する上で重要な要素であるということがわかった。

おわりに

ボレマンズはCROXという芸術家によって組織された団体にて初期活動を行っていたこと、そしてボレマンズが、作品を街中に展示し市民を巻き込むことを意図としたCROXのプロジェクトに参加していたことを明らかにした。しかし、当時CROXの知名度は低く、ボレマンズが国際的に活躍するようになった契機にフートが関係していると言える。

また「Crox17-1にて出展された作品」と《知的シリーズ：未知なるもの》の比較を通して、画面の外に向けた視線や、切断された身体描写の類似点を示した。この類似点は2000年以降に描かれる油彩画にも見られる要素であり、初期から現在にかけてボレマンズの関心が大きく変化していないことがわかった。

加え本調査を通し、CROXとフートに交流があったことがわかった。92年に、ヘルシルが大型屋外展示のプロジェクトとして「感嘆符」展を企画するも、フートが無謀だと批評したことによって、その企画は中止となった⁽³⁹⁾。また「オープン・ドア」というプロジェクトを開催した際、「開いたドア」とシャンブル・ダミとの差異について言及している⁽⁴⁰⁾。これらのことから、90年代に展開されたプロジェクトを含め、

CROX がフートの「シャンブルダミ」を意識していなかったとは考えづらい。

註

(ウェブサイトの最終観覧日は全て 2024 年 1 月 15 日)

- (1) ボレマンスの経歴は以下を参照。デイヴィッド・ツヴィルナー・ギャラリー「ミヒャエル・ボレマンス経歴」〈<https://www.davidzwirner.com/artists/michael-borremans>〉
- (2) 本展はバーゼル市立現代美術館、ゲント現代美術館、クリーブランド美術館で開催。
- (3) 本展はゲント現代美術館、パラソルユニット現代美術財団（ロンドン）、ロイヤル・ハイパーニアン・アカデミー（ダブリン）で開催。
- (4) ギャラリー小柳で開催された展覧会は以下の通り。個展「ミヒャエル・ボレマンス：アースライト・ルーム (Michaël Borremans : Earthlight Room)」(2008)、個展「ミヒャエル・ボレマンス：少女と手 (Michaël Borremans : Girl with Hands)」(2014)、二人展「ミヒャエル・ボレマンス | マーク・マンダース (Michaël Borremans | Mark Manders)」(2018)。
- (5) 横浜トリエンナーレ公式サイト「ミヒャエル・ボレマンス」〈<https://www.yokohamatriennale.jp/archive/artist/b/artist177/>〉
- (6) CROX 公式サイト「ミヒャエル・ボレマンス」〈<http://www.croxhapox.org/c/node/2537>〉
- (7) CROX 公式サイト「ホーネフェルト、ハーマン」〈<http://www.croxhapox.org/c/node/2875>〉
- (8) CROX 公式サイト「我々について」〈<http://www.croxhapox.org/c/aboutus>〉
- (9) 同上
- (10) 同上
- (11) ボレマンスは「ザ・シンギング・ペインターズ」の初期メンバーの一人。ボレマンス(ギター)、メルリン・パリダエン (Merlyn Paridaen/ ドラム)、ヘルシル (ボーカル) の 3 人組で活動を開始。1998 年 2 月に CROX(ゲント)、フォーカマー (Voorkamer / リール) で演奏。2022 年 12 月まで活動。CROX 公式サイト「百科事典」〈<http://www.croxhapox.org/c/encyclopedia/s>〉
- (12) CROX 公式サイト「アーティスト」〈<http://www.croxhapox.org/c/artists>〉
- (13) 前掲註 (6)
- (14) 同上
- (15) CROX 公式サイト「Crox17-1」〈<http://www.croxhapox.org/c/node/615>〉
- (16) 前掲註 (6)
- (17) 同上。98 年に脱退、99 年に復帰、2000 年 7 月に脱退。脱退後も 03 年、05 年、06 年、13

年に実施されたグループ展に参加。

- (18) 同上
- (19) CROX 公式サイト「コピーアートプロジェクト (1991-1992)」〈<http://www.croxhapox.org/c/node/2143>〉
- (20) 同上
- (21) 同上
- (22) 同上
- (23) CROX 公式サイト「通りすがり (1991)」〈<http://www.croxhapox.org/c/node/2354>〉
- (24) CROX 公式サイト「デ・ブーム、ヒューゴ」〈<http://www.croxhapox.org/c/node/2821>〉
- (25) CROX 公式サイト「感嘆詞 (1992)」〈<http://www.croxhapox.org/c/node/2202>〉
- (26) CROX 公式サイト「芸術」〈<http://www.croxhapox.org/c/node/621>〉
- (27) CROX 公式サイト「開いたドア (1996)」〈<http://www.croxhapox.org/c/node/2607>〉
- (28) CROX 公式サイト「百科事典」〈<http://www.croxhapox.org/c/encyclopedia/i>〉
- (29) CROX 公式サイト「デ・モルゲン」〈<https://www.croxhapox.org/c/node/2626>〉
- (30) マイケル・デネイヤー「ミヒャエル・ボレマンス・知的なオフィス」『フォーカマー公式サイト』〈<http://www.voorkamer.be/exhibition/micha-l-borremans>〉
- (31) 前掲註 (1)
- (32) スヴェンソン公式サイト「ミヒャエル・ボレマンス」〈http://www.svensonart.com/nl/artists/view/Borremans_Michael〉
- (33) ロジェ・フェルシュレン、クラス・デバッカー「アート界：『ヤン・フートはあなたを試した』」『スタンダード 公式サイト』〈https://www.standaard.be/cnt/dmf20140227_01001167〉
- (34) 前掲註 (30)
- (35) CROX 公式サイト「crox card 7」〈<http://www.croxhapox.org/c/node/1933>〉
- (36) CROX 公式サイト「crox card 8」〈<http://www.croxhapox.org/c/node/1934>〉
- (37) CROX 公式サイト「crox card 19」〈<https://www.flickr.com/photos/croxhapox/254239199/in/album-72157594302240126/>〉
- (38) ジバ・デ・ウェック・アルダラン「不可解な現実」ゲント現代美術館、パラソルユニット現代美術財団、ロイヤル・ハイバーニアン・アカデミー『パフォーマンス』ハティエ・カンツ社、2005年、89頁。
- (39) 前掲註 (25)
- (40) 前掲註 (27)